

旧庄内藩士末裔の三医師

黒羽根洋司

鶴岡地区 医師会

【目的】 旧庄内藩藩士の末裔で日本医学会に多大なる功績を残す3人の医師（現在も活躍中の2名を含む）について、その出自と事績について紹介する。

【方法】 当地区の郷土史資料館所蔵の資料の渉猟と関係者の聴き取りにて得られた事実をもとに、それぞれの足跡を辿りまとめた。

〈杉村隆〉1926（大正15）年4月20日生まれで健在であるから、現在93歳である。わが国の癌研究の第一人者にして、啓蒙、撲滅活動のリーダーである。その功績により文化勲章を受け、国立がんセンターの第七代総長となり、その後には東邦大学学長を6年間務めている。庄内にルーツを持つ杉村隆氏だが、その系譜を手短かに述べる。庄内との縁は、最初に仕えた加藤清正の長男、忠広が庄内藩にお預けとなり、その隨身として熊本からやって来た時から始まる。2代目まで62年間は加藤家に出仕して忠勤に励むが、その才をかわれ酒井家に召し抱えられる。加増を重ね八代目の兵右衛門は高280石の家督を継ぎ、大目付の要職を得る。時代は慶応年間、幕府の有力な藩屏であった庄内は討幕勢力との戦いに備えて、公武合体派の一掃を計る。杉村兵右衛門は丁卯の大獄、首謀者の名をもって「大山庄太夫一件」とも呼ばれる大粛清の取り調べと断罪の任にあたる。なお、その時に斬首された大山庄太夫は私の高祖父の兄である。杉村隆は兵右衛門から3代下った杉村家の正嫡である。父幹も含め、怪談作家や洋画家など個性的な人びとを輩出した杉村の家風を受け継いだか、隆の性格も来歴も一風変わっている。いずれにせよ、1949（昭和24）年東大医学部を卒業し、あとは癌研究ひとすじであった。1987（昭和62）年には鶴岡市名誉市民に推戴されている。

〈萬年甫（はじめ）、徹〉日本の解剖学、とりわけ脳・神経解剖の先駆者、萬年甫と神経内科学の泰斗、徹の兄弟も庄内藩藩士の裔である。1863（文久3）年からの萬年家法名帖が現存するが、それ以前と間を埋める資料は未だ乏しい。ただ萬年兄弟の祖父、正一は鶴岡近郊の大山という地で警察官を勤めている。明治維新で俸禄を失った士族たちには、警察官になる者が多かったことから、その祖は藩士であったことは間違いない。ちなみに、あの石原莞爾の父も庄内藩の士族上がりの警察官であった。兄弟たちの父、虎雄は鶴岡中学の17回卒、陸軍軍医委託生として東北医専（現・東北大学医学部）に入ったため、卒業後、軍医となり各地に赴任する。したがって、兄甫は千葉の市川市で、7歳年下の弟徹は父が除隊後に開業した東京の中目黒で生まれている。甫は東京帝国大学医学部卒業後、沖中内科を希望するが入局希望者が多かったことと学生の時に患った胸膜炎を理由に断念する。しかし、学生時代から興味があった母校の脳研施設の解剖学部門を選び、生涯の師、小川鼎三の門をたたき、優れた研究者であると同時に、偉大な教育者でもあった萬年甫は、東京医科歯科大学などで教鞭をとり、数多くの弟子を育てた。関東大震災の年に生まれた甫は、奇しくも東日本大震災の年の2011（平成23）年に鬼籍に入った。88歳であった。弟、徹は東大脳研神経内科の教授を務め、兄とは別の臨床の立場で、脳神経疾患の治療にあたった。1976（昭和51）年のロッキード事件の折には、医師団の一人として国会に証人喚問要請を受けた児玉誉士夫の健康状態を診断した。当時、講師であった徹は軽い失語症と診断した。現在も三井記念病院の名誉院長として活躍中である。

【結論】 旧庄内藩士を祖とする三人の優れた医学者の系譜をたどるとともに、それぞれの業績の大きさを評価することができた。